

筑豊の在日朝鮮人をめぐる記憶・追悼・継承

——キム・グァンヨル
金光烈、横川輝雄の足跡をめぐって

朴 康 秀

はじめに

- 1 筑豊と朝鮮人の歴史
- 2 金光烈の経歴と活動
- 3 横川輝雄の経歴と活動
- 4 金光烈による調査記録のまとめ——3 冊の本執筆
- 5 筑豊における歴史歪曲の諸問題
- 6 金光烈と横川輝雄の残した記録・資料
- 7 犠牲者を追悼することの意味、記憶と記録、その継承と検証
——在日 1 世から 2 世、そして 3、4 世以降の未来へ

おわりに

はじめに

かつて、筑豊地方は日本最大の石炭の産出地であり無数の炭鉱があった。石炭を掘り出す際に不純物混じりに出てくるボタは、捨てられ積み重なり山となったが、最盛期には 300 以上もの黒いボタ山が筑豊にはひしめいていたと言われる。危険な坑内の作業に事故はつきもので、ボタが 1 メートル積み上がると死人が 1 人出ると言われていた。大手炭鉱においては 100 メートルを超える巨大なボタ山が出現したが、どれほどの人がそこで働き、または犠牲になつたことだろう。そんな無数にあったボタ山も、今や数えるほどしか残っていない。しかも年月が経つと、黒かったボタ山は緑に覆われ、今や普通の山と見分けがつかない（写真 1、写真 A：オンライン掲載 * 本稿末の編集注記を参

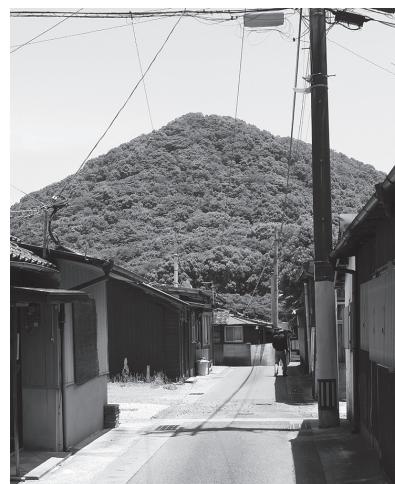


写真 1 炭坑住宅跡から見た忠隈炭鉱ボタ山

照)。現在、ボタ山は往時の筑豊を想起させる地域のシンボルとして見られたりもする。ある者は、日本を支えたエネルギーの宝庫としての筑豊の象徴がボタ山であると言い、血と汗と涙の記憶がそこにあると往時を懷かしむ。

では、朝鮮人にとってはどうであろうか。明治期以降、日本に様々な経緯で渡ってきた朝鮮人たちの多くが炭鉱で過酷な労働に従事した。特に、戦時期においては強制的に連れてこられ、事故が頻発した死と隣り合わせの労働状況の中で、犠牲になったり、あるいは逃亡したりする者もいた。そのような人たちにとって炭鉱はどのような場所であったか、ボタ山はどう感じられるのか。

筑豊は、かつて日本帝国主義下の最大のエネルギー（石炭）の産出地であった。そこに確かに存在していた朝鮮人たちの労働、生活、苦難、差別などは、「負の歴史」として認識され、触れてはいけないタブー視扱いされるか、または一方的な日本人側からの記憶——例えばそれは、「みんな仲良うしようよ」的な言説——によって糊塗されてしまうか、もしくは、なかつたことにされてしまっていた。

そんな朝鮮人たちの歴史の記録を丹念に集め、掘り起こし、記録する作業、あるいは犠牲者たちを追悼していったのは、政府や民族組織などではなく、研究者や記録作家、教員など、そこに居合わせた在野の人たちであったりした。

そのような人たちの中にあって、^{キム・グァンヨル}金光烈、横川輝雄の2人は特に大きな足跡を残している。かたや、在日1世の立場から、筑豊に居住することになり、いまだにお寺に放置されていた同胞の遺骨たちの存在に出会ったことから、その調査を始めた金光烈。また、日本人の立場から、筑豊の高校教員となり、厳しい背景をもつ生徒たちとのかかわりの中から、授業実践を通じて筑豊の地域に向き合ってきた横川輝雄。2人は全く違う立場とアプローチを取りながらも、対象となった歴史への誠実な向き合い方は共通している。丁寧に、丹念に、実証的に、そして徹底的に「事実」に向き合ったのである。

「ボタ山は私には墓標に見える」と金光烈は言った。その生涯を通じて、筑豊の炭鉱などで犠牲になった朝鮮人の記録を調査し、伝えていった金光烈にはボタ山は墓標に見えた。

「ボタ山の見える教育」、横川輝雄の教育実践をある人はそう評した。横川は、教員生活の多くを筑豊で過ごし、筑豊の炭鉱とかかわる様々な問題を教育に取り入れた。そして、横川は炭鉱での朝鮮人の調査、記録に全面的に取り組むことになった。

本稿では、金光烈、横川輝雄という2人の足跡をめぐることにより、主に1970年代から現在に至るまでの筑豊における在日朝鮮人の記録と記憶、その検証と継承について書き記したい⁽¹⁾。

1 筑豊と朝鮮人の歴史

筑豊地方に朝鮮人がいつから来始めたのか？ 記録によれば、1898年に古河下山田炭鉱に29名の「朝鮮労働者」が来たという記述がある（高野江1898）。これは「日韓併合」の12年も前の話である。日清、日露戦争において朝鮮半島、中国大陸への帝国主義的進出をしていたさ中で、すで

(1) 文章中、敬称は省略した。また、主に植民地期以前から一般的に使用された呼称として“朝鮮人”で統一した。

に日本の資本は朝鮮半島への労働力に目をつけていたことが分かる。

金光烈は著書の中で、「筆者の見聞の一部には、1900年前後には、各炭鉱は、不法を承知の上で朝鮮に渡り、ほとんど詐欺的方法と甘言で労働者を連れてきたというのがある」（金 2013：52）と述べている。金光烈の調査で判明した鞍手郡のお寺にあった朝鮮人の遺骨は1899年の炭鉱犠牲者だった。貝島大之浦炭鉱への朝鮮人来鉱は会社の記録によれば1917年からだが、貝島家の檀家であるお寺の過去帳には、朝鮮人犠牲者第1号の死亡は1909年という記録がある。

一般的には、朝鮮人が筑豊の炭鉱に多く姿を現すのは、「日韓併合」後の1910年代後半からだ。だが、実際にはその前、それも1900年前後から少なくない数の朝鮮人が来ていたと思われる。しかもそれは、不法であったり人権を無視したものであった可能性が高い。

1910年～1930年代、日本の植民地となった朝鮮から、日本へと渡る朝鮮人たちが増大する。この時期を「自由渡航」という一言で表現することは、大きく実態を見誤るだろう。植民地下における経済収奪の結果、土地を失い、故郷を追われ、朝鮮半島南部の人たちは多くが日本へと渡った。北部の多くの人々は、中国東北地方や沿海州地方を彷徨したのである。

1939年、国家総動員法が朝鮮半島に適用され、集団的な労働計画が閣議決定される。「募集」「官斡旋」「徴用」という3段階（実際には併用されていた実態もある）は、しかし、その内容において違いはなく、この時期の朝鮮人の日本への移動は強制連行、強制労働、あるいは強制動員と位置づけられる。

炭鉱記録画家として、その日記や絵が世界記憶遺産へと登録された山本作兵衛の500枚を超える絵の中には、何故か朝鮮人炭坑夫の姿が1枚もない。しかし彼は、その自伝的な著作の中で、唯一、戦時における炭鉱と朝鮮人のことを次のように述べている。「なんというても一番暗い思いが残るのは、第2次世界大戦中のことであります」「中小炭鉱も大手炭鉱も、じっさいにはまったく変わりありませんでした。いずれもみな、明治時代の大納屋の監獄部屋と化しておりました」「大手炭鉱では、朝鮮からの徴用夫はもちろんのこと、中国人の捕虜や、英米の捕虜が数多く強制労働をさせられておりましたが、なにしろ日本人の坑夫でさえこんな状態ですから、それこそ目も当たらない虐待であったようです」（山本 2011：112-116）

横川輝雄が福岡県立図書館で発見した、県庁文書の中の「昭和二十年十月二十七日知事更迭 事務引継書」⁽²⁾によれば、福岡県に戦時動員された朝鮮人は1945年6月までの累計で17万1千人、うち筑豊地方の炭鉱には15万人が連行されたと推定される。

1900年前後からの、日本への渡航者たち、その後の「日韓併合」以降の植民地化経済収奪による日本への「自由渡航者」たち、さらには国家総動員法による強制動員、これらすべてが朝鮮人の移住の歴史であり、今の私たちに直接つながっているものなのである。

2 金光烈の経歴と活動

金光烈は1927年、韓国慶尚北道大邱市で出生、1943年に日本に留学、立命館大学を卒業し、

(2) 県庁文書「昭和二十年十月二十七日知事更迭 事務引継書 福岡県」民生課文書

1958年に福岡市立千代小学校の民族学級講師、以後、福岡県、愛知県の小・中・高校で民族学校教員を経て、1969年田川市に居を移す。

田川への“異動”は、当時の総連組織内での事情によるものだったと言う。筆者は本人から「当時、私は組織からバージされた」という話を聞かされたことがある。本人にとっては不本意な処遇であったろう筑豊行きは、しかし、その後の金光烈の生涯をかけた一大作業への出会いとなった。

筆者は1969年後半頃、田川市に来て、筑豊の変わり様に大いに驚いた。「このままでは筑豊の歴史が消える。この歴史は我々朝鮮人の歴史もある。私達の父母が兄や姉が、汗と涙と血と死で築いた歴史だ。遅きに失したが、今からでも残っている物、生きている証言者に会い調査し記録を残すべきだ。これを解った以上、それを為さない事は、この歴史の実質的創造者である先人に対する不義理であり、期待に対する裏切りであり、民族に体する犯罪ではないか。また、今後の正しい歴史の進路を規定するためにも、史実を明らかにしなければならない。」これが筆者の調査活動への思いであり基本的主張であった。(金 2004: 420)

当時、筑豊の炭鉱の歴史はすでに風化し始めていた。金光烈が調査を開始した1969年当時でも、体験者は非常に少くなっていた。関連の資料を探し出そうとしても、どこにもそれらしきものはない。その当時の朝鮮人の足跡を確認できる場所として思いついたのがお寺である。

筑豊には無数のお寺があった。炭鉱全盛期、筑豊には数多くの中小炭鉱が乱立し、中央資本の大手炭鉱もこぞって進出していた。そこに炭鉱があれば、全国から労働者が集まり、その家族との生活が始まり、学校もでき、商業が栄えていくことになる。つまり炭鉱が栄えれば、そこには活気を呈した街ができ上がるのだ。そんな筑豊の各地に、相当数のお寺が生まれ、地域の交流の場として様々な役割を担った。そのような地域の交流拠点としてのお寺の重要な役割として、仏事、葬儀があった。炭鉱における公的な記録がほほない状況で、朝鮮人たちが生きていたほぼ唯一の記録こそはお寺の過去帳であり、そこに残されていた遺骨だったのである。朝鮮人の生涯の最期、すなわち“死”的記録こそが、そこに朝鮮人が生きていたという証になったのである。「どのお寺に行けばいいのか、どのお寺で同胞の葬儀が行われたのだろうか? そんなことを1人で悶々としていてもどうにもならない」。金光烈は筑豊の全ての寺院を廻潰しに訪ねて調べることにしたのである。もちろん、それは容易ではない作業だった。

現在、お寺の過去帳は、決して他人に見せてはいけないという原則がある。これは、単に個人情報の保護という観点からだけではなく、部落差別につながる人権の問題になるからである。筑豊の炭鉱は特に被差別部落との関係が深いのだが、ここでは深入りしないでおく。

過去帳の調査は当時でも簡単にできるものではなかったが、金光烈はお寺の住職に、その意味を丁寧に説明し、ある時は何回も何回も通っていく中で、ようやく了解を取って、朝鮮人の記録を取っていった。「うちにはそんな記録はありませんよ」と言われたものの、実際に調べてみると、過去帳に朝鮮人の名前を発見することも珍しくなかった。また、創氏改名などによる、日本名の中には、日本人住職には判断できなくても、在日朝鮮人の立場から判別できるものあったりした。さらに、遺骨の調査でも同じように、「うちにはないよ」と言われたお寺に、朝鮮人の遺骨が放置されていることがあった。

金光烈が実質的に筑豊の全てのお寺を調査、記録をした期間は、1970年代～1990年代の20数

年だという。過去帳で確認された朝鮮人の全死亡者数は2,200名+多数、遺骨は520体+多数（1989年8月17日現在で老若男女、植民地下全時期、金2007:21）。1939年から始まる所謂「強制連行」は、在日朝鮮人の歴史の一部であり、大きな意味を持つが、それが全てではないという。「国家総動員法による動員は、強制連行、強制動員の1つの典型であるが、在日朝鮮人の存在理由の全てではない」。

筆者が金光烈に会った時（1990年前後）は、お寺の調査はほとんど終わった後であった。金光烈の調査は、大抵1人で行われた。当時、その活動に支援や賛同をする人はほとんどいなかった。

2つの民族団体はどうだったか——永く所属していた朝鮮総連（在日本朝鮮人総連合会）は「個人が勝手なことをするな！」という態度だった。民団（在日本大韓国民団）も相手にはしなかったという。「この思いを、思想信条を超えて当時の筆者の知己であった主要な民族幹部に持ちかけ説得したが、まったくと言っていいほど理解がなく、一部の者は筆者の提案を挫くためにわざわざ訪ねてきて、理不尽な脅迫まがいのことを言った」（金2004:420、※一部編集）。

南北の政治的対立が激しかった時期であり、「この問題は民団、総連の区別なく、ともに取り組まなければならない」という金光烈の主張は取り上げられることはなかった。

金光烈は訪ねて行ったお寺の住職に対して、「この遺骨はいつか親許に返してあげるまで、大事に供養していくほしい」とお願いした。その後、金光烈による調査により、寺院内における遺骨の所在が明確化されたことで、それを探し出すことが容易になる。結果、これらの遺骨を、様々な人たちや民団が、慰靈碑や納骨堂に移したり、祖国（韓国）に送ることとなった。現在、後述する田川市の法光寺などの例外を除けば、お寺等でそのまま預かっているものは殆どないだろうと思われるが確実なことは分からぬ。以下はその経過である。

- ・1973年、大韓基督教小倉教会の崔昌華牧師^{チヨエ・チャンファ}が、筑豊のお寺にある遺骨を収集し、門司の納骨堂「永生園」に遺骨を安置した。現在は85体がある。（当初は150体）
- ・1975年、田川市法光寺に安置されていた、朝鮮人の遺骨数十体（合葬されていたため正確な数は分からない）が、境内の慰靈碑建立時にその中に納骨された。
- ・1976年、金光烈が麻生セメント田川工場社宅傍にあった穴観音のお堂で32体の放置された遺骨を発見、麻生会社に納骨堂を建立させ、発見された遺骨や位牌などを安置する。（発見した32体のうち14体を朝鮮人のものとした）
- ・1980年代に民団福岡県本部が数回にわたり福岡県内のお寺の遺骨を収集、約300体を韓国の「国立望郷の丘」へ移送した。
- ・2000年、在日朝鮮人と日本人有志らでつくる団体が飯塚の国際霊園内に納骨堂「無窮花堂」^{ムグンファ}と追悼碑を建立、各地のお寺から遺骨120体が安置された。（3体は遺族に返還され現在は117体）

1980年代の民団による遺骨収集・送還事業に関しては、民団福岡県本部から金光烈に対して、協力要請がなされた。だが金光烈はこれを断った。金光烈の遺骨に関する原則は、先ず親許に返すこと、それができないのならば、せめて祖国の公的な慰靈施設などに送り安置してあげること、それらの記録を残し後世に残すことであった。民団による事業は、遺骨を収集し韓国に送ることを目的化していると金光烈は判断したのだ（ただし、名前も分からぬ多くの朝鮮人無縁仏が、韓国の公的な慰靈施設である「望郷の丘」に送られ、祖国の地で供養されるようになったことは、

結果的には良いことであったと筆者は考える)。

また、無窮花（ムゲンファ）堂（福岡県飯塚市の市営飯塚靈園内にある朝鮮人無縁仏の追悼施設）に関しては、その中心的な役割を担っていた人たちとは、金光烈に対して協力要請すら行っていない。それは、後述する、筑豊における歴史歪曲の数々の事例について金光烈が厳しく批判してきた人物たちが、この無窮花堂の中心的な人物であったからだ。

いずれにしても、金光烈によるお寺の徹底的な調査により明らかになった遺骨の所在が、後の80年代の民団の遺骨収集・送還事業と、2000年の無窮花堂建立への遺骨収集中大きな成果と役割を果たすことになったのは事実である。それは金光烈が考えていた原則にどれだけ忠実であつただろうか。

金光烈は生涯の記録の集大成として3冊の本を書き上げ、2015年9月にこの世を去った（享年88歳、写真2）⁽³⁾。

3 横川輝雄の経歴と活動

横川輝雄は1940年出生、幼少期を下関、中学と高校を八幡で過ごす。九州大学の学生時代には新聞部に所属していた。横川は当時（1960年前後）、筑豊、中間の大正炭鉱の炭住（炭鉱住宅）に住んでいた森崎和江や谷川雁に原稿を依頼したことがあったと言う（横川2003：13-14）。森崎和江、谷川雁はともに上野英信らとともに、文芸誌「サークル村」の運営にかかわり、筑豊に居住することにより、作家や詩人としての活動を行ってきた人たちである。

1950年の朝鮮戦争勃発による「朝鮮特需」により戦後復興の足がかりを掴んだ日本では、経済成長の反面、様々な内部矛盾を露呈していた。石炭から石油へのエネルギー変換により、国内の炭鉱は軒並み斜陽産業化、日本最大の産炭地で、中小含めて300以上の炭鉱がひしめいていたと言われる筑豊では、おびただしい数の失業者、転職者であふれ、特に中小炭鉱での貧困の問題などが顕在化した。その時期に刊行された土門拳の写真集『筑豊のこどもたち』は、当時の失業にあえぐ人々とその子どもたちを鮮明に写し出した写真集としてベストセラーになった。横川輝雄は当時発売されたその本（パトリア書店発刊でザラ紙に印刷された定価100円のもの）を大事に持っていただけでなく、のちの教員時代の教材として活用した。多感な学生時代に社会に対する問題意識を芽生えさせた横川輝雄は、いつか筑豊で教員になりたいと思った。

九州大学卒業後、1963年～2001年まで横川輝雄は38年間、高校教員として勤務した。うち1973年からの24年間は筑豊の高校で教鞭を執った。横川輝雄の唯一の著書である『ボタ山の見え

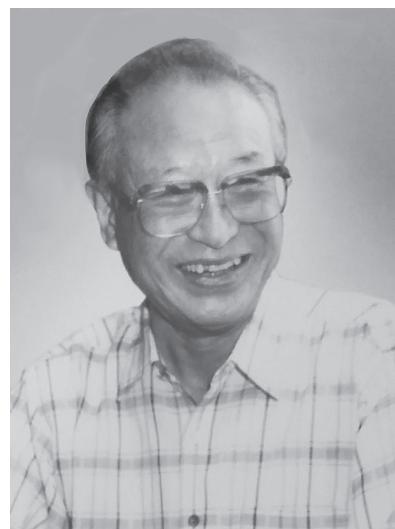


写真2 金光烈（ご家族より提供）

(3) 著作の内容に関しては4節で述べる。

る教育——全ての教育活動に解放教育の視点を』（碧天舎、2003年）には、毎年主題を定めて授業に取り組んだ内容が記されている。

- | | |
|------------------|-----------|
| ・朝鮮人強制連行 | ・土呂久ヒ素中毒 |
| ・中国人強制連行 | ・水俣病 |
| ・アイヌ人 | ・炭鉱犠牲者追悼碑 |
| ・ハンセン病 | ・「障害」者 |
| ・軍隊「慰安」婦と産業「慰安」婦 | ・産業廃棄物処理場 |
| ・原爆被害者 | ・日米安保条約など |
| ・アジア太平洋戦争 | |

※これらにはすべて「筑豊の炭鉱と」が前につく。（横川 2003：182）

横川輝雄の教育実践は、教室の生徒たちに寄り添うことであり、それは生徒の住んでいる筑豊という地域に真正面から向き合うことであった。筑豊・炭鉱という地域のもつ様々な課題に取り組むことが、のちの朝鮮人問題への取り組みにつながったことは、横川にとっては自然な流れだったのかもしれない。彼が筑豊地域で勤務を始めた1973年という時期は、炭鉱会社が次々と閉山するその最終期であった（筑豊最後の炭鉱閉山は1976年の貝島大之浦炭鉱）。また、1973年の翌年には、「強制連行真相調査団」が北九州、筑豊地域での調査を行うことが予定されており、地元の教員を中心とした人たちがその受け入れ準備をしていた時期とも重なる。これらの動きに横川がどの程度、かかわっていたかは分からぬが、彼の教育実践やのちの彼の活動に大きな影響があったことは間違いないであろう。

筆者が横川輝雄と出会ったのは、1990年前後で、北九州の市民団体が主催した「強制連行の足跡を若者とたどる旅」という行事の中であった。横川輝雄、林えいだい、崔昌華ら、今から考えるとそうそうたるメンバーが講師として、筑豊の現地を案内していた（金光烈ともこの筑豊フィールドワークで出会った）。

横川輝雄は当時、「筑豊ヤマの会」の中心メンバーとして、教員らとともに活動していた。「ヤマの会」は筑豊の朝鮮人強制連行の各現場を丹念に調査した。現地における調査はしかし、風化しており記憶をたどることは困難であった。そんな中でも横川輝雄は徹底的に事実を検証していく姿勢を貫いた。文書や公的な記録が乏しい中でも、証言記録などをとった。しかし、証言には食い違い、勘違い、思い込みなどが含まれることが往々にしてあった。その場合、3人の証言が一致した時に「事実」と認定するという方法を取ったという。

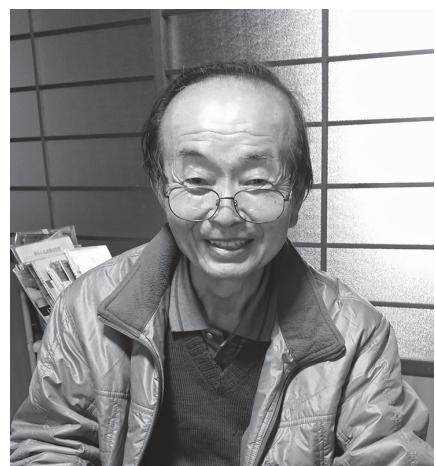


写真3 横川輝雄
(2015年12月7日自宅にて)

横川輝雄は「地理」の教員であった。彼が残した資料の中には、自分で作成した現場の地図が少なからず残っており、非常に貴重である。各地域の炭鉱の場所、坑口、朝鮮人寮の場所、朝鮮料理屋（特殊飲食店）など、今では分からなくなってしまった場所を特定している。

横川輝雄が福岡県立図書館で発見した、県庁文書の中の「昭和二十年十月二十七日知事更迭 事務引継書」資料（写真4）から、それまで明らかになっていたいなかった戦時期の福岡県への朝鮮人の連行者総数のほぼ最終的な数字（17万1千人）が判明した（前述）。また、『県政重要事項』内の県知事「事務引継書」の中で、福岡県各炭鉱における連行者数の数を示した重要な資料（「労務動員計画ニ依ル移入労務者事業場別調査表」1944年1月現在）⁽⁴⁾も、横川輝雄によって発見された。

これまでに筑豊を訪れた実に多くの人たちが、横川輝雄の案内で近現代における炭鉱の現場をめぐった。特に朝鮮人強制連行、強制労働の研究において、どこまでも実証的に、そして誰よりも誠実に調査をしているその姿勢は、多くの人たちに感銘と多大な影響を与えた。

2005年、「強制動員真相究明福岡県ネットワーク」が結成され、金光烈、横川輝雄、武松輝夫、林えいだいらの研究者が名を連ねる（ただし、林えいだいはこの段階で体調が思わしくなく会議などにはほとんど参加しなかった）。同ネットワークの目的は、韓国の強制動員真相究明委員会との連携、福岡県での強制動員・死亡の真相調査、遺骨の調査・返還、また、これらの調査の結果を広く市民に知らせ、真相究明と和解の取り組みを社会化していくというものだった。金光烈と横川輝雄は積極的にこのネットワークに参加し、共同作業を行った。特に、横川輝雄は初期の段階から中心的な役割を果たしていた。お寺や慰霊施設などにおける朝鮮人の遺骨調査、筑豊各自治体の持つ「埋葬・火葬認可証」の提出要請、韓国からの調査の受け入れ、現地フィールドワークなど、横川輝雄が果たした役割は大きい。

2014年5月、ネットワーク主催の筑豊フィールドワークが行われ、これが横川輝雄による最後の現地案内となった。病身であったにもかかわらず、2日間にわたるフィールドワークで横川が準備した32ページに及ぶ手作りの資料は今見ても圧巻である。筆者は、この後、数度にわたってみやこ町にある横川の自宅を訪問し、様々な教えを請うた。その時に教示された糸田町の真岡炭鉱に赴くことで、その後、筆者は真岡炭鉱慰霊祭へ参与し、中心的な呼びかけを行うことになる。

2021年1月、横川輝雄はこの世を去った（享年80歳）。

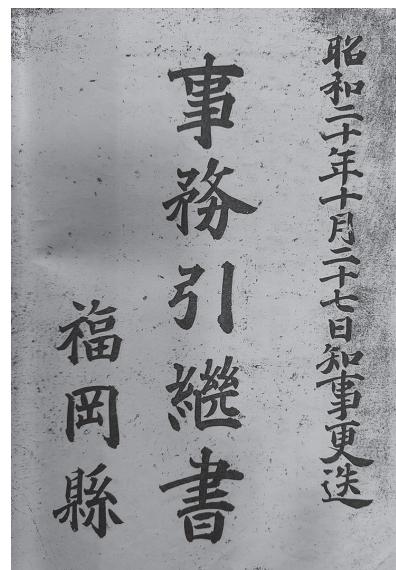


写真4 県庁文書
(横川が当時複写したもの)

(4) 県庁文書「昭和十九年七月 県政重要事項 福岡県」内「昭和十九年三月 移入半島人労務者ニ関スル調査表 特別高等課」

4 金光烈による調査記録のまとめ——3冊の本執筆

金光烈は以下の3冊の著作を世に出している。

『足で見た筑豊——朝鮮人炭鉱労働の記録』明石書店, 2004年

『風よ, 伝えよ——筑豊朝鮮人鉱夫の記録』三一書房, 2007年

『「内鮮融和」美談の真実——戦時期筑豊・貝島炭礦朝鮮人強制労働の実態』緑蔭書房, 2013年

最初の著作『足で見た筑豊』では、豊州炭鉱、貝島大辻炭鉱、三菱方城炭鉱、田川の石灰山について、体験者・関係者への聞き取りや、お寺の過去帳や関連文書の調査などで、当時の朝鮮人の苦難の歴史を書き出している。ことに、最終章での「田川の石灰山」における朝鮮人労働者の調査は、金光烈以外の調査事例は殆どなく、唯一無二の貴重な記録と言える。1976年、調査の過程で発見された遺骨は、麻生セメント田川工場に建てさせた見立墓地納骨堂に、今も安置されている。

2冊目の著作『風よ, 伝えよ』には、田川、赤池、川崎、大任、添田地域でのお寺を中心とした調査記録をまとめている。古河大峰炭鉱の調査、峰地炭鉱における集団暴行殺人事件の調査は、当時の生々しい実態を浮かび上がらせる。また、古河大峰炭鉱の跡地付近にある、共同墓地（俗称“H墓地”）について、“事実”が何であるか、歴史がいかに捻じ曲げられていくかを詳述している（次節の②で述べる）。

3冊目の『「内鮮融和」美談の真実』は1冊全巻を通して、貝島大之浦炭鉱についての研究調査記録である。筑豊の炭鉱御三家（貝島、麻生、安川）と呼ばれ、地場の炭鉱の中でも最も大きな規模を誇る炭鉱であり、筑豊において最後に閉山（1976年）したのが貝島であった。貝島大之浦炭鉱の位置した宮田町（現宮若市）は、まち全体が巨大な炭鉱であった。金光烈は、その閉山の現場、特に宮若市石炭記念館、第6坑の事務所、第7坑朝鮮人居住地などに足しげく通ったという。

金光烈は3冊の本を世に出したが、生涯の記録をまとめるには、あと何冊もの本を出したかったのではないかと筆者は考えている。特に、飯塚や嘉穂、山田地域（いわゆる嘉飯山地域）にも多くの炭鉱があり、金光烈の膨大な調査記録が存在する。この地域は、所謂「麻生」の本拠地であり、1932年には、数百名の朝鮮人が参加した「麻生争議」の現場でもある。争議の発祥の場であった「芳雄橋」や、溢れ返った朝鮮人たちが寝泊まりしていた「曩祖八幡宮」を通るたびに、金光烈は麻生争議について語っていたことを思い出す。これに関してだけでも1冊分の内容があるだろう。

5 筑豊における歴史歪曲の諸問題

強制連行、強制労働の現場の調査、掘り起こし作業の中では、往々にして矛盾した証言や記録、事例などが出てくることがある。これらは証言者たちの思い違いや、事実誤認、感情的な思い込みからくる誇大な表現などが独り歩きした結果、あたかもそれが事実であるかのように流布されてしまった言説などである。

歴史の事実を調査し記録していくことがいかに大切であるか、歴史を恣意的に歪曲し、自分たち

に都合の良い物語にしてしまう行為は、何人たりとも許されるものではない。権力を持つ者たちによる歴史の造作は独裁へと直結する。しかし、権力を批判する者たち、中でも「隠された歴史の真実を伝えていかなければならない」などという主張をする者たちの中でも、自分たちの運動に都合の良い物語を作り上げ、それを指摘しても認めず、歴史修正を続ける人たちがいる。どんな立場の人たちであろうと、恣意的な歴史の造作をするのであれば、それは「歴史修正主義」であり厳しく批判されなければならない。

金光烈と横川輝雄は、「事実」を追求する徹底的な姿勢において共通していた。幾人もの証言者への聞き込みと、それらを立証する資料など、できうる限り、立場の違う人たちの証言者、特に朝鮮人、日本人など、加害と被害の関係性の中から事実を抽出していった。

金光烈は、かつて自分と共に活動したり、指導していた人たちであっても、事実の歪曲に対しては、徹底的に批判した。以下は、金光烈がその本や、文章、普段の言動の中で指摘していた諸問題である。

① 豊州炭鉱のハングルの壁文字（写真5）

1965年、豊州炭鉱の朝鮮人寮であった「協和寮」跡で、ハングルで壁に書かれた文字が雑誌『太陽』に掲載された。

「어머니 보고싶어 배가고파요 고향에 가고싶다 !!!」（お母さん会いたい 腹が減ったよ 故郷に帰りたい !!!）

1974年、九州地方強制連行真相調査団が筑豊での調査を開始した時に、この壁文字は各新聞に大々的に取り上げられ、その後、上野英信の「筑豊文庫」に飾られることによって、広く知られるようになった。韓国の独立記念館でも1987年～1996年まで模型が展示されたが、その後、「歴史的考証がない」と撤去された。

金光烈は当時、強制連行され協和寮に収容されていた安龍漢への聞き取りで「あの厳しい時代にまともに見える所に書くなんてとんでもないです」との証言を得る。また、『朝鮮人強制連行の記録』の著者で、先行研究者の大先輩である朴慶植からは、壁文字を書いたのは「身内」のもので、朝鮮画報のカメラマンであることを教えられる。

2000年1月3日、8日の西日本新聞には、この壁文字の検証記事が載り、①壁文字は映画撮影のための演出、②書いた本人の確認、までが記事化された。

壁文字の内容は、当時の朝鮮人の心情を実に良く表している。しかし、だからと言って造作

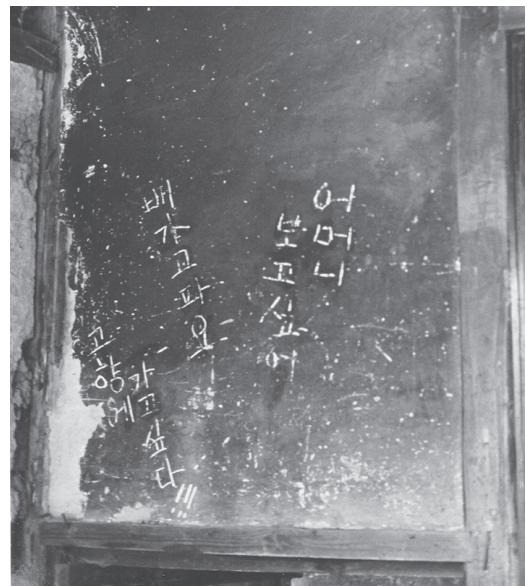


写真5 豊州炭鉱の壁文字
(撮影者不明・1960年代後半)

されたものを本物であるかのように宣伝することは、事実の歪曲であり許されるものではない（金 2004：130-150）。

② 古河大峰炭鉱跡地の共同墓地（写真 6）

俗に「H 墓地」という名称で呼ばれているこの墓地は、筑豊の朝鮮人強制連行の現場を象徴するほどに有名な場所である（H とはこの墓地にあるお墓の家の名前である。金奇東氏^{キム・ギドン}が最初に案内した場所の前に建つ大きな墓が H 家のものであったことから「H 墓地」と呼ばれるようになった。この墓地の正式な名称がないので便宜的に使われていたが、本来は関係がないので、ここでは古河大峰炭鉱跡地“共同墓地”と呼ぶことにする）。

1973 年にここを最初に案内したと言われる金奇東氏は、ここに朝鮮人の墓があるとだけ説明している。その朝鮮人がどのような人たちだったのか、いつ埋葬されたのか、男性か女性か、大人なのか子どもなのか、など具体的なことは何も語っていない。ただ、墓地の入り口にある犬猫の墓が戒名まであるのに対して、ろくな墓標さえない朝鮮人の実態や運命があまりにも悲惨なことを訴えた。ここはいつしか“H 墓地”と呼ばれるようになり、筑豊の強制連行の実態を象徴するほどに有名な場所となった。数多くのフィールドワークで多くの人たちがここを訪れているが、いつの間にか説明の内容が変容していく。「朝鮮人の墓地」「37 基の自然石やボタ石などが朝鮮人の墓」「37 人の強制連行された朝鮮人の墓がある」「陽信寮の朝鮮人の墓」「愛汗寮の朝鮮人の墓」であるなど、どれも明確な根拠はない⁽⁵⁾。自然石やボタなどを墓標にしたものは筑豊の至る所で見ることができる。そのほとんどは貧しかった日本人のものと思われる。もし埋葬されている朝鮮人がいるとすれば、乳幼児の可能性が高いだろう。しかし、それすらもはっきりとしたことは分からぬ（金 2007：110-131）。

③ 「法光寺・朝鮮人炭坑殉難者之碑」の解説版に書かれている「朝鮮人の犠牲者…2 万人」（写真 7）

田川市の法光寺には 1975 年に建立された「朝鮮人炭坑殉難者之碑」がある。“寂光の碑”とも呼ばれるこの慰靈碑には、数十体の朝鮮人の遺骨が内部に安置されている。戦後すぐに、恐らくは近くの炭鉱から朝鮮人の遺骨として預かり、寺へ安置されていた。遺骨の数は合葬されているので正確な数は分からぬと言う。この遺骨について、いくつかの団体が引き取りを申し出たが、当時の住職は政治的に偏りたくないとの思いから、自らのお寺の境内に碑を建立して慰靈をすることにした。以降、数多くの参拝者がこの慰靈碑にお参りをしている。

その碑の横には 1997 年に“説明版”が建てられた（写真 B：オンライン掲載）。朝鮮人強制連行の歴史的背景を記したその説明文には、看過できない重大な問題がある。



写真 6 古河大峰炭鉱跡地共同墓地
(2018年11月24日撮影)

(5) 陽信寮、愛汗寮はともに古河大峰炭鉱に強制動員された朝鮮人たちの寮であり、実質的な収容所である。

1910年、日本は朝鮮半島を統治下に治め、以後1945年の敗戦まで植民地として支配を続けました。特に1931年から日本が行なった15年戦争のために国内の労働力が不足し、この筑豊に於いても石炭採掘の労働力として、約15万人の朝鮮人が強制的に連行されてきました。以降1945年までの強制労働と劣悪な環境の中で約2万人が坑内事故や病気で亡くなられました。

この殉難碑には、このような過酷な歴史を生き、祖国の山河や親族に再び会うこともできずに無念のおもいで亡くなっている朝鮮人の遺骨が安置されています。

ここに集う者、皆共に歴史の事実を心に刻みたいものです。「寂光」は、お経に「常寂光土」——常にやすらかな光に満ちた世界——いわゆるお浄土のすがたをあらわした言葉です。

(説明版より本文のみを記載、下線は筆者による)

強制動員期（39年～45年）に筑豊に強制連行された朝鮮人の数は15万人という数字が推定されているが、そのうち2万人（13%）が亡くなったとはあまりにも膨大である。特高警察資料である福岡県の「労務動員計画に依る移入労務者事業場別調査表（昭和19年1月末現在）」では死者合計数は711人。それから1年半は戦争末期となり死傷者は増加していくので、最終的には1,400人～2,000人くらいではないかと推測される。いずれにしても2万人という数はありえない（金2007：15-26）。

④ 「徳香追慕碑」（写真8）

桂川町の麻生吉隈炭鉱の山の神には、「徳香追慕碑」と刻印された碑が立っていた。1982年に地元住民が、倒壊している碑の再建を、村おこしのシンボルとして桂川町に要望し碑は再建された。その際に、麻生吉隈炭鉱で1936年に坑内火災事故があり、29名が犠牲となり、その多くが朝鮮人であるという史実が分かった（その後、金光烈の研究結果の提供により朝鮮人の犠牲者は25名であることが判明した）。碑の建立を推進したグループは、碑の説明版を作成し、「徳香追慕碑は1936年の麻生吉隈炭鉱の坑内事故の慰靈のために建てられた」と刻んだ（写真C：オンライン掲載）。

しかし、当初、このグループの活動に賛同し協力をしていた金光烈によって疑義が提議される。「徳香追慕碑」は1936年の麻生吉隈炭鉱の坑内事故の慰靈のために建てられたものではないというのが、金光烈の結論だった。



写真7 法光寺・朝鮮人炭坑殉難者之碑（2015年10月撮影）



写真8 徳香追慕碑（2015年10月撮影）

金光烈の所持する「徳香追慕碑」の写真（1976年2月15日撮影分）には、碑の裏面に「昭和17年3月10日建之」と刻まれている。これによって、碑は事故後すぐに建てられ、その後に「再建」されたものだと主張していた人たちは、徳香追慕碑は再建ではなく、1942年3月10日建立であることを認めた。この日時は太平洋戦争が始まって3か月後の陸軍記念日である。また、金光烈は地元の多くの人に調査をして、この碑が「忠魂碑」とか「忠靈塔」と呼ばれていることを明らかにした。金光烈の主張に対する同グループからの、明確な論拠を伴った反論は現在までない。

「徳香追慕碑」が実のところ何の目的で建てられたものであるのかは分からない。しかし、この碑が1936年の麻生吉隈炭鉱の坑内事故の慰霊のために建てられたものではなく、ましてや朝鮮人のために建てられたものではないことは明白だ。この碑には今までたくさんの人たちが参拝し、想いを寄せてきた。1994年に新しい石碑を建立する時には民団、総連、韓国領事館を巻き込んだ式典を行った。このようにたくさんの人たちの善意や想いは尊いものだ。ならばなおさらのこと、「徳香追慕碑」に対する史実の間違いを認め、根本的にやり直すべきだ。

⑤ 「小竹町合盟墓地供養塔——松岩菩提供養塔」（写真9）

多数の強制連行された朝鮮人の遺骨が埋葬され、それが供養されているということになっているが、そのような根拠はない。

1992年、ゴルフ場造成の折に出てきた遺骨について、当時のマスコミは“200体以上の遺骨が掘り起こされ、中には多数の強制連行された朝鮮人の遺骨がある”と報道した。しかし、掘り出された遺骨の国籍をどうやって証明できるのか。この地は共同墓地であり、そのほとんどは日本人のものと思われる。もちろん、その中に朝鮮人の遺骨がないと100%言い切ることはできない。もし、そこに朝鮮人の遺骨があるとすれば、その多くは乳幼児のものと思われる。朝鮮人が、充分に育たなかつた乳幼児のお墓をその地に葬ることは充分にあり得る。また、筑豊の各地で公開された埋葬火葬認可証においても、それは証明されている。

1939年以降の強制連行された朝鮮人は会社によって厳しく管理されていた。事故や病気などで死亡すると、会社が葬儀・火葬して遺骨は朝鮮の故郷に送還していた。戦争末期で日朝間の連絡船での往来が難しくなったり、身寄りのない遺骨に関しては、お寺に預けるのが一般的だった。共同墓地などに埋葬、放置するなどということは全くないとは言い切れないが、一般的だとは言えない。

大量に出てきた無縁仏を丁重に慰霊すること自体は尊い行為である。しかし、「松岩菩提」はそこに祀られている遺骨の多くが強制連行された朝鮮人のものと印象付け、プロパガンダとなっている。これは史実（事実）を歪曲する行為である。



写真9 松岩菩提（2017年12月撮影）

⑥ 無窮花堂（写真 10）

無窮花堂歴史回廊に展示されている“朝鮮人坑夫の墓や無縁仏”には根拠がない。歴史回廊に展示されているのは、住友忠隈炭鉱のボタ山の無縁墓地と、古河大峰炭鉱跡の共同墓地（俗称“H墓地”）にあるボタや自然石などについて、それを朝鮮人坑夫の墓や無縁仏であると説明している。このような無縁仏（墓標）は筑豊の至る所で散見されるが、そのほとんどは貧しい日本人のものであると思料される。



写真 10 無窮花堂歴史回廊
(2015 年 12 月撮影)

⑦ 「俱会一処」の碑——旅人墓（写真 11）

1969 年、日鉄二瀬炭鉱高尾鉱業所の跡地で、宅地造成の折に、大量の遺骨が掘り返された。工事に従事した人々が無縁仏の出土に心を痛め建てたのが、「俱会一処」の碑であり、俗称、旅人墓である。碑の裏には「共立鉱業栗原利男、明星菊一建立」と刻印されており、納骨庫の中には、今でも骨壺や骨が破碎されたまま散らばった状態となっている。

旅人墓とは、全国から炭鉱に職を求めてやってきた「渡り坑夫」と呼ばれた人たちが、事故などで亡くなり、身寄りがなく無縁仏になり祀ったものを指す言葉である。しかし、ここに建てられた「俱会一処」の碑は、いつしか強制連行された朝鮮人の墓であると、まことしやかに説明されるようになってきた。ここでも②⑤⑥で書いてきたように、掘り返された遺骨の多くは日本人のものである可能性が高い。無縁仏を追悼することは尊い行為だが、伝聞や思い込みを誇大に解釈し、あたかもそれが事実であるかのように断定することは歴史の歪曲である。

⑧ 田川市石炭・歴史博物館

田川市石炭・歴史博物館で再現された炭鉱住宅の一角の炭鉱資料室に展示されている「朝鮮人労働者」についての内容は大いに問題がある。中国人と違い、まるで日本人と同じ待遇であったと書かれている⁽⁶⁾。

《資料室には次の説明文がある》（写真 D：オンライン掲載）

(6) この⑧に関しては金光烈、横川輝雄の双方から話を聞いたことはない。知らなかった可能性がある。しかし、重大な内容を含んでいるため、筆者の判断で書き記す。



写真 11 「俱会一処」の碑
(2019 年 7 月撮影)

戦争と中国・朝鮮の労働者

○中国人強制連行

かつて第二次世界大戦の末期（1943～44年），戦火が太平洋に拡大されたとき，日本政府は国内労働力の不足を補い，戦時下の生産量を確保するため，当時進行していた中国大陆から中国軍捕虜及び行政供出によって中国人を日本国内に強制連行した。

このなかで三井鉱山田川第二坑に372名，第三坑に297（移送中に1名減）の669名が華北の収容所から送り込まれ，市内4か所（千代町1番15，川宮1570，伊田5000松原2区，三井鎮西3番11）の高塀に囲まれた「華人寮」に分散，収容所暮らしをしながら，終戦まで石炭生産に従事させられた。その間6名が作業現場で災害による殉職，20名は病死（内3名は獄死）している。

※行政供出：労働力確保のため，日本の政策に協力する機関を中国につくり，人集めを割り当て実行すること。

○朝鮮人の炭坑労働

太平洋戦争開戦前，筑豊地区の炭坑における朝鮮人労働者は，全体の約13%であった。しかし，現場の日本人炭坑労働者が戦争に行くことによって不足した人員を補うため，1944（昭和19）年9月から「国民徵用令」が，それまで免じられていた朝鮮人にも適用された。そのため，朝鮮人炭坑労働者の割合は，なお一層増加し，筑豊地区全体の約33%となった。

また，朝鮮人の炭坑労働者は，華人寮のような収容所にくらすのではなく，日本人と同じ炭住街の一角に居住していた。

※国民徵用令：日中戦争下において戦時経済統制を実施するため，1938（昭和13）年に施行された国家総動員法に基づいて各種の勅令が公布・施行されたうちのひとつ。戦時下の重要産業の労働力を確保するために，厚生大臣に対して強制的に人員を徵用できる権限を与えたもの。

筑豊地区朝鮮人炭坑労働者数とその割合

	昭和16（1941）年	昭和19（1944）年
筑豊地区全炭坑労働者数	68,997人	91,321人
筑豊地区朝鮮人炭坑労働者数	9,213人	30,079人
朝鮮人の割合（%）	13.36%	32.94%

「……不足した人員を補うため，1944（昭和19）年9月から「国民徵用令」が，それまで免じられていた朝鮮人にも適用された。」——この書き方は，朝鮮人強制連行，強制労働の問題を1944年9月～1945年8月までの問題であるかのように矮小化して表現している。

朝鮮人労働者が，日本政府の政策による集団的な労働計画に沿って日本に動員されたのは1939年からである。最初は「募集」という形態を取り，植民地下における経済収奪下に喘いでいた朝鮮人は，甘言などもあり多数が集まることになる。しかし，連行先の多くが劣悪で危険な労働環境である炭鉱などであることが知られていくと，朝鮮人は集まらなくなっていく。そこで日本政府は，より強制力の強い「官斡旋」方式，そして最終的に「徵用」を実施した。しかし，以上の3段階は，実際には併用されていたとする実態もあった。そして，その内容は「募集」であろうと，「官斡旋」，「徵用」であろうとも変わらないものであった。つまり，「入り口は違えども，朝鮮人労働者にとってその内容はほとんど変わらないものであった」ことが，研究者や証言などによって明らかになっている。このような実態から，1939年～1945年の時期を朝鮮人に対する「強制連行」「強制労働」あるいは「強制動員」という言葉で言い表すことができる。

「朝鮮人の炭坑労働者は、華人寮のような収容所にくらすのではなく、日本人と同じ炭住街の一角に居住していた。」

朝鮮人が筑豊の炭鉱に多く現れるようになるのは1910年代の後半以降である。日本の植民地統治による経済収奪によって、故郷を離れ異国へと移動していった朝鮮人たちは、1920～30年代には一定の“定住化”傾向を見せていく。言語や生活習慣、職場における技能などを習得していった朝鮮人たちの中には、日本人と同じ炭住などの居住空間で暮らすようになった者たちもいたであろう。このような人たちと1939年以降に強制的に動員されてきた朝鮮人労働者たちでは、状況がまるで違う。朝鮮人寮に収容された朝鮮人たちは、厳しい監視と暴力的な支配を受けていた。特高警察資料によれば、当時の筑豊の炭鉱に「移入」された朝鮮人労働者（すなわち強制動員された朝鮮人たち）の逃亡率は50%を超える。逃亡した朝鮮人たちは捕まるとなにかしらの懲罰を受けた。まさに「収容所」に他ならなかった。

6 金光烈と横川輝雄の残した記録・資料

金光烈は生前に、自分の記録した全てのものを、韓国の国家記録院に寄贈する意思を示していた。2018年、遺族により、金光烈の記録はすべて、韓国国家記録院に移された。46年間にわたって収集された記録物は、段ボール43箱分、13万件に及ぶ膨大な量であった。国家記録院では、全ての資料を整理、解析し、基本的に全てを公開するとしている（これは遺家族の意向でもあった）。これらの業績に対して、韓国政府は金光烈に対して、2019年6月、国家勲章である「冬椿章」を授与した。

金光烈の残した膨大な記録は現在、韓国の研究者たちによって活用されようとしている。

横川輝雄の記録物（これもまた金光烈のものと同じく膨大なものであった）は、他界後、田川市の「ありらん文庫」に移された。そこは林えいだいの居宅であった場所である（写真E：オンライン掲載）。金光烈、横川輝雄と同時代を生きた林えいだいは、記録作家として、筑豊の朝鮮人に関する数多くの著作や映像作品などを残している。出版物やマスコミなどを通じたその影響力は、他の追随を許さない。林えいだいが記録作家でありジャーナリストであったのに対し、金光烈、横川輝雄は研究者であったと言えよう。三者は時として交流し、協力をしたりもしたが、林えいだいのジャーナリスティックなやり方や資料の収集方法などに対しては、金、横川ともに手厳しい批判をしたりもした。

金光烈、横川輝雄の研究者としての徹底した事実へのこだわりに対して、林えいだいの記録物には検証不足な点が数多く見られるのは否めない。筆者は、林えいだいに対して永らくあまり好意的な感情を持っていなかったが、彼が死の間際まで記録することへの執念を見せた姿勢に（特に晩年期はある朝鮮人特攻隊員の死刑、冤罪の真相を追求していた）敬意を禁じ得ない。林えいだいの残した多くの記録もまた、後世の自分たちが検証して引き継いでいくことに意味があるのだろうと思う。

横川輝雄の記録資料が、友人でもあった林えいだいの住んでいたありらん文庫（田川）に移され

たのは意味のあることだと言えるだろう。現在、横川資料は整理中だが、これをどう活用していくかは大きな課題である。

7 犠牲者を追悼することの意味、記憶と記録、その継承と検証 ——在日1世から2世、そして3、4世以降の未来へ

金光烈、横川輝雄の歩いてきた道をたどって筑豊の各地をめぐっているが、歩いても歩いても分からぬことだけだ。巨大であるはずの炭鉱の痕跡は、今やほとんど残っておらず、記憶たちも風化している。お二人が生きている時に、どうしてもっとたくさんのがれこれを聞いておかなかつたのかと、後悔することばかりだ。それでも、今この地点から自分なりにやっていくしかない。

今年は戦後、または敗戦後、あるいは解放80年である。いま、筑豊の現場に1世の証言者は誰もいない。すでに2世の方々が高齢化している状況だ。筆者はぎりぎり2世世代であり、現在の3、4世世代へ、今残しておかなければ消えてしまうであろう記憶と記録たちを伝えていく大きな過渡期にあると考えている。

筆者が今、筑豊でかかわっている炭鉱関連の追悼行事は以下の通りである（写真F、G、H、I：オンライン掲載）。

写真F：小倉炭鉱——1940年5月20日の出水事故で亡くなった朝鮮人の調査、追悼行事

写真G：真岡炭鉱——1945年9月17日での事故で亡くなり、戦後64年で本名を刻んだ慰霊碑での追悼行事

写真H：三好炭鉱——三松園の山中での朝鮮人を含む犠牲者の名前を刻んだ石仏群の清掃、追悼

写真I：麻生セメント田川工場犠牲者の見立墓地納骨堂の管理

筑豊の各地でかかわってきたこれらの行事では、常に慰霊とは何か、追悼とは何かということを考えざるを得ない。異国之地で亡くならざるを得なかった朝鮮人たちを思い、それを記憶すること、何故、彼らは犠牲にならなければならなかつたのか、そして彼らの記録が殆どないのは何故なのか、死してなお、放置されてきた遺骨たちの現実……これらは全て生きている私たちに直結する問題に他ならない。だからこそ、悲劇を繰り返さないためにも、次世代へと伝えていかねばならない。

おわりに

この原稿を書いている時期の2025年6月～9月にかけて、筆者は韓国の研究者たちによる北九州、筑豊地域の4回にわたる現地遺骨調査活動に随行している。各お寺や納骨堂などの事前の下調べや連絡、現地案内と通訳などを全面的にコーディネートした。

2005年の日韓会談で協議された結果実施された、日本政府の全国のお寺や慰霊施設に対する朝鮮人遺骨の調査結果を踏まえ、その資料と、金光烈の記録資料をつき合わせて、今回の調査は実施された。日本政府の調査から実に20年もの時が経っていることに、正直納得がいかない思いは

あったものの、その時その時の日韓間の政治的関係が影響した結果だという。もどかしい思いを抱きながらも、金光烈や横川輝雄が歩んだ道を歩いて回っているという実感はあった。特に30数か所のお寺への調査は根気と体力が必要であった。

調査の過程では思いもかけない出会いや発見、めぐり合わせがあり、80年の今日でもまだ、異国の方に残され帰れない朝鮮人の姿に出会った。調査結果が公表されない限りは、具体的なことはここでは書けないが、依然として課題が多く残されていることを強く実感した。

また、実質筆者が管理している見立墓地納骨堂や横川輝雄資料についても、その活用の方法について具体的な方向性を模索しなければならないことを感じた。

筑豊の在日朝鮮人をめぐる記録、記憶を検証し、継承していく作業は、私の中ではまさに今、現在進行形で進められている。その作業が未来の在日コリアンや日本人たち、本国の同胞たちへ向けた作業となり、メッセージになることが必要であり、そのことこそが、慰靈であり追悼であるのだろうと思う。

(ぱく・かんす 北九州市立若松中央小学校民族学級講師)

*編集注記：写真 A～Iは、本誌オンラインジャーナル公開サイト (<https://oisr-org.ws.hosei.ac.jp/oz/>) に掲載します。

【参考文献】

- 金光烈（2004）『足で見た筑豊——朝鮮人炭鉱労働の記録』明石書店
金光烈（2007）『風よ、伝えよ——筑豊朝鮮人鉱夫の記録』三一書房
金光烈（2013）『「内鮮融和」美談の真実——戦時期筑豊・貝島炭礦朝鮮人強制労働の実態』緑蔭書房
三・一独立運動100周年記念講演会実行委員会（2019）「〔「徵用工裁判」をどう見るか——日韓の歴史問題を考える」三・一独立運動100周年記念講演会、許光茂講演録」
芝竹夫（2001）『歴史を刻む在日コリアンたち』向陽舎
戦争と筑豊の炭鉱編集委員会編（1999）『戦争と筑豊の炭鉱』海鳥舎
高野江基太郎（1898）『筑豊炭礦誌』中村近古堂（復刻版1975年）
土門拳（1960）『筑豊のこどもたち』パトリア書店
花房俊雄・花房恵美子（2021）『閨釜裁判がめざしたもの——韓國のおばあさんたちに寄り添って』白澤社
　　発行、現代書館発売
山本作兵衛（2011）『画文集 炭鉱に生きる——地の底の人生記録』講談社
横川輝雄（2003）『ボタ山の見える教育——全ての教育活動に解放教育の視点を』碧天舎
행정안전부 국가기록원（2020）『강제동원 김광렬 기록으로 말하다 기억해야 할 사람들』（行政安全部 国家記録院『強制動員 金光烈 記録で語る 記憶されるべき人々』）



写真 A 住友忠隈炭鉱三連ボタ山



写真 B 法光寺説明版 (2015年10月撮影)



写真 C 德香追墓碑の説明版 (2015年10月撮影)

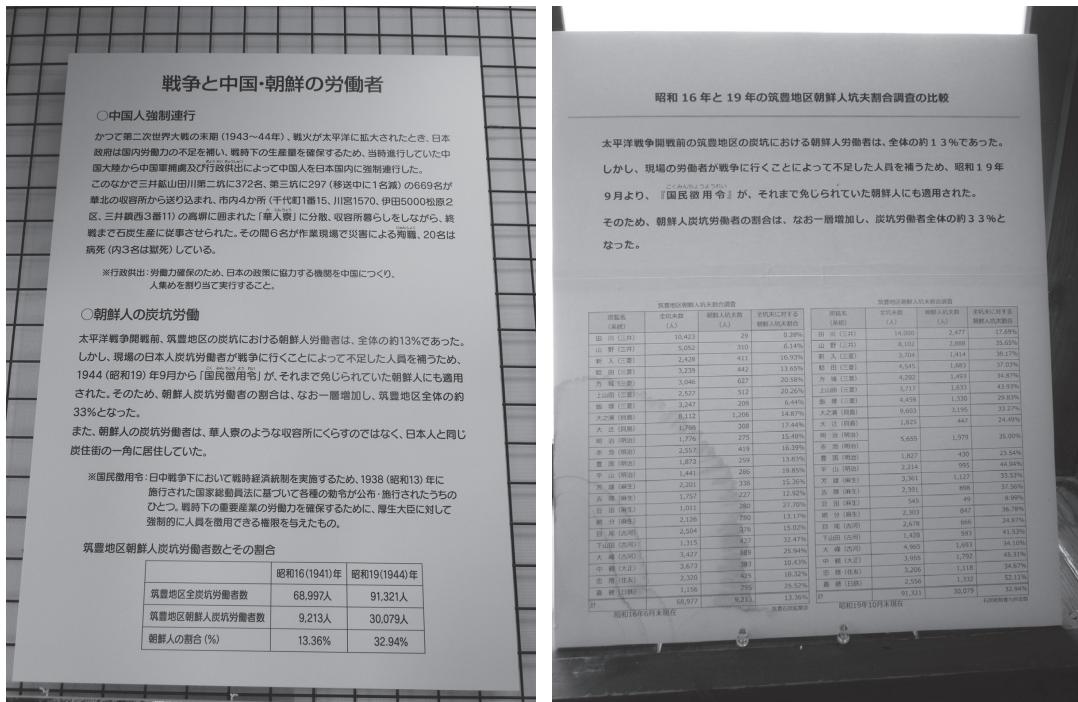


写真 D 田川市石炭・歴史博物館炭鉱資料室のパネル（2018年9月撮影）

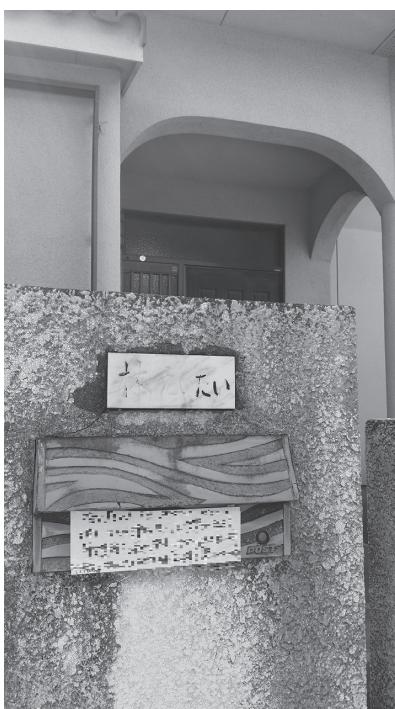


写真 E 田川のありらん文庫と横川資料の展示のために作られた看板



写真 F 小倉炭鉱慰靈碑



写真 G 真岡炭鉱慰靈碑



写真 H 三松園石仏群



写真 I 見立墓地納骨堂